
戦い好きの勇者【改訂版】

鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦い好きの勇者【改訂版】

【Nコード】

N5836T

【作者名】

鈴鹿

【あらすじ】

王様の勅命で動いているとか言う勇者からの同行要請を断ったら、黙ってついて来いと首に剣を突きつけられた。

これはもう、反撃しても正当防衛だよな？

殺意には殺意を持って反撃。致命傷を与えられ、仲間にも見捨てられた自称・勇者は死亡。

そしたらなんと、騎士団が来やがった！

クソ、餓鬼に突っかかれてから不幸続きだ。

第1話：俺様勇者死す（前書き）

はじめまして、鈴鹿御前と申します。

今回、初投稿です。

至らない点や誤字などがあると思いますが、徐々に修正していく予定です。

では、ごゆるりと……

追記

短編から連載に直しました。

さらに修正加筆を加えました。

短編の方は処女作なので過去を振り返るためにも未編集で残します。

第1話：俺様勇者死す

俺の名は、エイブラハム・ウォーロック。しがない冒険者だ。

俺は、強い奴と戦うことが大好きだ。

弱い奴？ 雑魚に用はねえよ。弱い者イジメをするやつのがしねえな。

んなことやって何が楽しいんだ？

一瞬判断ミスが死を招く緊張感

命のやり取りを経て生き残った喜び

自分が強いと感じられる充実感

こりゃ、弱い者イジメなんかじゃ到底得られねえ代物だ。

そしてそれを得るために今日もまた、魔物相手に戦い生き延びた。

今日の敵は強者と言うに相応しかった。一步間違えば、地に伏しているのは俺だったかもしれないねえ。

金を稼ぐために受けた依頼で、強者に会えるのは極稀だ。

現に、その魔物も依頼の範囲外の乱入者だったしな。

だが、おかげで危険手当が上乘せされた。

強者と戦えて、さらに金まで手に入る。

最高じゃねえか！

強い奴が出そうな依頼は速攻で受けているが、残念なことに俺が満足出来るレベルの相手は、冒険者の店に依頼が回ってくる前に国

の騎士団連中が片付けちまう。

冒険者では荷が重いんだとか……

ちっ、人の獲物をもつていくんじゃねえよ！

なら騎士団に入れればいいって？

冗談。あんなお堅い連中と団体行動なんて出来るわけねえ。
俺は自由を愛するんだよ。

それに、騎士団は連携して戦うからな……

いや、連携を否定する気はねえよ？

あれも戦い方1つだ。

けどよ。男なら1対1が普通だろ？

そんな感じで珍しく、当たりの依頼を引いて店で酒をのみながら
機嫌だったんだよ。

あの餓鬼がくるまでは……

そのとき、俺はステイル王国の最北端、北辺境の街『インダス』に
俺は居た。

「おらよ。ウォーロック！ 注文のチーズステーキサンドと極冷エ
ールだ」

カウンターに座っていた俺の前に、食欲をそそる匂いを上げるチー
ズステーキサンドとジヨツキから僅かに冷気が昇るほど冷えたエー
ルが置かれた。

引き換えに今日の稼ぎの一部をマスターに渡した。

「毎度あり」

マスターは、ほかの客の注文を作り始めた。

俺は、熱々のチーズステーキサンドにかぶりつく。

とろけるチーズソースの暑さに火傷そうになりながら、極冷エールを

流し込む。

「うめえ！今この瞬間だけは、このためだけに生きてるって言えるぜ」

マスターは大袈裟だ。と笑いながら流したが、生きて帰ってきた後の飯と酒は最高に上手い。これだって生きていなきゃ食えねえし、強敵と戦った後なら俺が生きっていると空腹を満たして教えてくれる。

「おい！この店にエイブラハム・ウォーロックと言う男がいるはずだ。どいつだ！」

入り口を蹴り破るような勢いで入ってきた奴が大声で俺の名を呼んだ。

一旦、食うのを止めて振り返ると、3人の大人を引き連れたまだ成人もしていないような餓鬼がいた。

（こいつは厄介ごとの匂いがしやがる早いとこ食べてずらかろう）

俺の直感が厄介ごとの匂いを感じ取り、関わり合いになる前に逃げようと残りの飯と酒を片付けにかかった。

あまり信じたくないが、嫌な予感ほどよく当たる。

餓鬼は一直線に俺のいるカウンターに向かってきた。

気付かれたか？ そう思ったが、ここで警戒しては俺だと名乗りを上げるようなものだ。極力平静を保って急いで飯を腹に入れた。

「君がこの店のマスターか？」

どうやらバレだ訳ではないらしい。

「いかにも。名は……」

「ああ、君の名などどうでもいい。さっき言った通りエイブラム・ウォーロックと言う男を探している。ここに入り浸ったっているのはわかってる素直に言いたまえ」

マスターは、餓鬼に気づかれないようにちらりと俺を見た。

(どうする？シラをきるか？)

(頼む)

マスターのアイコンタクトに僅かに頷いた。

こういう個人経営の店は、一見よりも常連を大事にする。

俺はここを拠点に1年近く活動している。

マスターは一見の餓鬼より常連の俺の味方をしてくれる。

「生憎だが、今日は……」

「おっと、言い忘れていたが、僕は勇者の一族だ。今、王の勅命で動いている正直に言わないと国家反逆罪に問われることになるから、その辺をよく考えて答えるように。それているの？いないの？」

額を隠しているバンダナを取るとそこには、王国の国旗の元にもなっている勇者の証が淡く光っている。

それを見たマスターの顔が青くなった。

勇者の一族と言えば、先祖はステイル王国を救った英雄であり、神から強力な加護を受けている者たちだ。

本物であれば、地位の高さは王族と変わらない存在だ。

(すまない。ウォーロック。俺は……)

(謝るな。しかたねえよ)

マスターにアイコンタクトで謝られた。

俺みたいな流れ者の冒険者なら国外にでも行きゃいいが、店持ちのマスターはそういうわけに行かねえ。

「こちらのカウンターに座っている者がウォーロックにございます」「貴様がエイブラム・ウォーロックで間違いないか？」

「いかにも。俺がウォーロックだ。それで、勇者様が俺なんぞに何の用で？」

一応、いつもの乱暴な言葉使いはしない。
ここで逆らっても何一ついいことがないからな。

「お前を旅の荷物持ち兼護衛として同行させるために来た」
「……………はあ？」

なに言ってるんだ？ この餓鬼。
荷物持ち兼護衛？
そんな依頼は受けた覚えねえぞ。

「マスター、俺はそんな依頼受けてたっけ？ 受けてたなら手違いだから破棄しといてくれ」
「いや、うちではそんな依頼は受けてないぞ。そんな依頼を出した覚えもない」

だよなあ。俺も記憶にねえし。

「なんかの間違いじゃないのか？」

「お前は、この辺りで最強の戦士なんだろ？ なら俺様の護衛にう

「つてつけど」

「だから、護衛の話なんざ聞いてねえって言ってるだろうが！」

「今、言ったばかりだからな。さあ、来い。出発するぞ」

「誰が行くと言った！」

「なに、お前より強い奴が見つかったら放してやる」

「だめだ。完全に話が通じない。」

「マスターに迷惑をかけるかもしれないが、殴っても止めさせるしかないな。」

「こんな餓鬼にあごで使われるなんて真つ平だ。」

「餓鬼がほざくなよ。俺はお前なんかとは行かない。行きたきゃお前一人で勝手に行きやがれ」

「俺様に逆らうのか？ 俺様は王の勅命で動いているんだぞ！」

「はっ、だからどうした。勅命なんざしらねえよ。俺は冒険者だ。王に従う必要はねえ！」

「勅命？ はっ笑わせんな。そんなもん知るか。」

「俺はこの国の国民でもないし、王の部下でもない。勅命だろうがなんだろうが聞く義理はねえな！」

「貴様！ 国家反逆罪だぞ」

「上等。冒険者に国家反逆？ 俺たち冒険者は流れ者だ。国なんざとまり木に過ぎねえよ。なあ、野郎ども！」

「「「おうよ！……」」」

「周りで酒を飲んで飯を食っている冒険者は当たり前だと声を上げる。ここで飲み食いしてる連中はほとんどが冒険者だ。」

「中にはこの国生まれの奴も居るだろうが、冒険者つつうのは自由人の集まりだ。」

国の法で縛ろうだなんて無駄だ。

「貴様!!!!」

自称・勇者の餓鬼は腰に付けた剣を抜いて、俺の首に突きつけた。

「殺されたくないなら黙って従え！」

俺は餓鬼ではなく、突きつけられた剣を見る。

綺麗に装飾された刀身、一点の曇りもなくピカピカで、真新しさがひしひしと伝わってくる。

インダスの街まで来るには、馬で夜通し走っても1週間はかかり、どのルートも盗賊もしくは魔物が出る。

それらに会わずにここまでくるのは至難だ。

おそらくは、後ろにいる3人が戦い、この餓鬼自身は戦いに参加していないのだろう。

でなければ、こんなに剣がきれいなわけがない。

「おい、餓鬼。剣を向けるってことは、当然向けられる覚悟はできてんだよな？」

「この期に及んでまだ口を開くか。今、貴様の命は俺が握っている。泣いて土下座すなら剣を引いて奴隷として旅に同行させてやるぞ？」

言葉に含んだ怒気に気付くこともなく、まだ戯言を言ってやがる。

これが、怒気に気付いた上で言えるなら少しは見所があるんだろうが、この餓鬼は単に気付いていない馬鹿だ。

(ああ、こいつは何もわかってねえな)

内心でため息をつく。

弱いものイジメは好かないが出来ないわけじゃない。

喧嘩を売られれば誰でも買う。俺はそういう生き方をしてきた。

そこには強者も弱者もない。

動物相手なら実力をわかつた上で喧嘩を売ってくるから、ある程度実力のある奴しか仕掛けてこないんだがな……

人間の場合、実力差を調べずに喧嘩を売ってくる。それどころか弱い奴ほどよく売ってくる。

東方の地に『弱い犬ほどよく吠える』と言う言葉があるがまさにその通りだ。

「さあ、答えろ！」

「殺す気なら殺されることを覚悟しとけよ」

右手でエールが入ったジョッキを餓鬼の顔に投げた。

「がっ」

見事に顔面へ直撃し、怯んだ隙に剣を持っている腕を掴み、投擲用ダガーで餓鬼の首筋を斬った。

「え？ がぶっ」

餓鬼は、なにが起こったかさっぱりわからないという顔で呆然と俺を見ている。

「はあ、ちつとも面白くねえ」

掴んでいた腕を放して突き飛ばした。

ここで、錯乱しながらでも斬り掛かってくれれば少しはマシだが、未だに事態を把握できずに呆然としている。つくづく救いようがない。

これが魔物相手なら、即座に追撃を受けて腹の中に納まるだろうな。

「え……何？ 血？ 血が出てる！？ 神官なにをしている！ 治癒呪文を早く使え！」

餓鬼は、後ろにいる3人のうち1人に声をかけた。

「いやです」

神官服を着た女に命令する餓鬼。

だが、そいつから帰ってきたのは、はっきりとした拒否だった。

「なんだと?!」

「勅命を盾に無理やり神殿から連れてきて顎でこき使われて、もううんざりです」

「貴様！ 魔法使い、狩人、神官を殺せ」

餓鬼は激情に任せて残り二人に命令を出した。
が……

「それは得策ではないな。彼女以外に君を直せる者がいない。説得するのが正道だろうがこの様子ではそれも無理そうだ。諦めたまえ」
「この嬢ちゃんには怪我した時に世話になったからな、恩を仇で返す気はねえな。それに俺もあんたは嫌いだ」

ほか2人も餓鬼の指示に従わず、勇者の足元に血だまりが広がっていく。

「いっのはんぢやぐじゅどぼへ……」

喉まで血が上ったんだろうな。ろくに言葉にならず、床に倒れた。こつして、自称・勇者の餓鬼の冒険は国を出ることなく終わった。

第1話：俺様勇者死す（後書き）

はい。

自称・勇者ザ死亡！

まあ、仲間を道具としか見ていないので当然と言えば当然の結末です。

もう出番もない予定なので設定公開。

自称・勇者

ウォーロック

主人公は、勇者だと認めていないので、自称が頭に着きます。

それ以外の人はちゃんと勇者と呼んでいます。

自己中心の俺様キャラで、仲間を便利な道具としか見ていません。

ほか3人の仲間

神官：実力ではなく単に体目当てで指名され、神殿から引き抜かれた。

純潔を失うと魔法が使えなくなると言う嘘を付いて大事には至らなかった。

狩人：道案内 兼 遠距離支援。

店のマスターと同じように反逆罪で脅され、いやいや仲間になった。

残りは次のあとがきで！

第2話：不要な加護と自己中心なお願ひ

「おいおい、店ん中で殺しは勘弁してくれよ」

「あー悪いマスター」

「まあ今回はいいか。俺もコイツの態度にはムカついてたしな」

実力もないくせに威張り散らすのは冒険者として下の下だ。

ある意味。カこそがすべての世界において、ハリボテの威勢に価値はない。

周りの連中は、何事もなかったかのように騒いで飲み食いしている。この街で人死になどしょっちゅうだ。

せいぜい、店で死ぬか外で死ぬかの違いしかない。

「はあ、あとで身ぐるみ剥ぐから端にどけてこれでも掛けといてくれ」

マスターはボロいシーツを手渡した。

「仕方ねえ」

脈を調べて死んでいることを確認し、餓鬼の死体を引きずって店の端に寝かせる。

上から預かったボロシーツをかけた。

「それで、あんたらはどうするんだい？」

マスターは、いつの間にかカウンターに座った3人に声を掛けた。

「さて、特に決めていないな。この辺りに遺跡でもあれば潜るのだ

が……」

「遺跡ねえ。残念だがこの辺りに遺跡はないな。国境の向こうならあるかもしれんが…… そっちの2人は？」

「私は、神殿に帰ろうと思います。あんなのでも一応勇者だったので、王様に顛末をお伝えしなければならぬので」

「僕も村に帰るので途中まで神官さんを送っていきます」

「ありがとうございます」

あの餓鬼はよほど好かれていなかったんだな。哀れみの言葉さえない。

まあ、あの態度からして相当好き勝手に振舞ってたんだろっし、自業自得だろう。

「だが、今からすぐにはいかないだろう？ もうすぐ夜になる。

出歩くのは危険だ。一泊していくといい」

マスターは3人に宿泊を進めた後、エールを俺の前に置いた。

「ウォーロック、さっきはすまなかったな。これは詫びの気持ちだ飲んでくれ」

「気にするな。全部、あの餓鬼が悪い」

「そうだな。ところであいつの仲間は何人帰っているのか？ 念のため、足止めしといたが」

「別に問題ねえだろ。あいつらも餓鬼を見捨てたしな。王族に自分たちの事を隠して話したところで、調べられたら今回の件を知ってる奴からばれるのがオチだ。そうだったあいつらも無事ではすまねえ」

「それもそうか」

「いざとなったら、国外に逃げるさ。所詮、流れ者だからな。さてと、それじゃ、もう寝るわ。強い魔物の討伐依頼があったらキープ

しといてくれ」

「あいよ」

借りている部屋に引っ込んでさっさと寝た。

「…者よ。勇…よ」

「んだ。よづるせえな」

耳元で女の声が何度も聞こえた。

目を覚まして体を起こすと、目の前に光輝く女がいた。

「何者だ？ あんた。人間じゃねえな？」

「初めまして、勇者を絶った者よ。我は光の女神」

光の女神？ たしか、勇者に加護を与えた神様じゃなかったか？

そんな女神がわざわざ俺の前に……

もしかして仇討ちとかそういうのか？

俺は警戒して、何かあれば枕元に置いた武器を掴んで戦えるように体勢を変えた。

「警戒しないで欲しい。勇者を絶った者よ。私は敵対しにきたわけではない」

「なら何の用だ？」

「勇者を絶った者よ。汝に加護を授けよう」

「はあ？」

いきなり加護とか言われても困るんだが……

そもそも、勇者を殺したのに加護をやるっておかしくねえか？

「なぜ俺にそんなもの（加護）を送るんだ？」

「汝が最後の勇者を絶つたからだ」

「最後？」

「しかり。あの者が過去に加護を与えし勇者最後の末裔。末裔がおらぬ今、我は血筋を絶つた者に加護を授けよう」

つまり、初代勇者最後の血筋を俺が潰して、もう勇者の血を引く人間が残っていないと。

で、加護を与える相手がいないから、血筋を途絶えさせた俺に加護をくれると。

「かわりに魔王を……」

「いらねえ」

「は？ 今なんと？」

俺の返事を聞いて固まっている女神。

「そんなもん（加護）なんぞいらねえって言ったんだ」

自分で身につけた力ならともかく、他人から与えられた力なんて頼るべきではない。

武器だってそうだ。

強い武器を得ても俺自身が強くなつたわけではない。

武器の力を自分の力と勘違いすれば、武器がなくなつたときに致命的な隙になる。

だから武器を鍛えるのではなく己自身を鍛えるのだ。

最終的に信じられるのは自分の力のみ。それが俺の考えだ。

「すごい力ですよ？ 限定的な不死、強力な魔法、異常状態の耐性に身体能力の向上まであるといいのに、それがいららないと？」

「いらねえ。そもそも、不死なんて加護があるなら何であの餓鬼は

死んだ？」

「それは、かの者のレベルが与えられた加護を発現しているに達していなかったから……」

「レベル？」

聞きれない言葉だ。実力を示すものか？

「レベルとは、経験とでも言えばいいのでしょうか。蓄積された様々な経験の目安みたいなものです」

「なるほど。で、あの餓鬼は経験、レベルだったか？ それが限定的な不死を貰えるほど高くなかったと」

「そうです。本来なら、一番最初に扱えるようになる加護であり、勇者の血筋であれば、生まれたときから扱えるのが当然なのですが

……」

「なるほど。それでか」

「？」

一人納得している俺をみて、何のことだが判っていない女神。

「あの餓鬼もどんな加護が与えられるか知ってたんだよな？」

「そのはずです」

「そこが落とし穴だな。大方、あの餓鬼は自分には不死の力があると過信してたんだろう」

「どういうことですか？」

「道中の魔物はお供任せで戦わず、不死が備わっていないことを知らないまま俺に喧嘩を売った。今まで魔物はお供に任せていたの自分で喧嘩を売ったのは、どうせ周りの目でも気にしたんだらうな。

結果、俺に殺された。ほら、不死の力を過信した結果がコレだ。笑えるぜ」

「……」

「そういうわけで、加護を与える相手なら他を当たってくれ。王族なら大歓迎するんじゃないか？」

「……それではダメなのです」
「なんで」

「汝の……いえ、あなたの言うとおり、最後の勇者が死んだのは加護の過信が原因でしょう。ですが、コレは私にとっても転機なのです。私は初代勇者に加護をを与えました。しかし、人としての質は代を重ねるごとに低下して、それに伴い継承される経験も減り、生まれたときから扱えるはずの不死さえ扱えなくなつた。あなたの言う通り、加護を過信し自らの努力を放棄した結果です」

「過ぎた力に溺れたか。それでよく勇者なんて名乗れたもんだ」

「しかし、初代との約束で血が絶えるまで加護を返してもらつことは出来ませんでした」

「それを俺が絶つたと、だがなんで他じゃなく俺なんだ？ 別に血筋を絶つた者に拘らなくてもいいだろう？」

俺より強い奴なんぞ広い世界にいくらでもいるだろう。

仮に俺が世界最強だったとしても、多勢に無勢ならいくら強かろうと関係ない。

強さとは個と数だ。

俺は数の強さを捨てて個の強さに拘つた。自分ひとりで何処まで出来るのか。それが知りたかつたからだ。

そんな奴が、勇者なんぞになれるはずがない。

個人の力と周りの力、2つがあつてこそ真の最強だ。

個の最強など、真の最強の前には小さいものだ

自分の身だけを守るならいざ知らず、その他大勢を守るならその他大勢の力が必要になる。

あの餓鬼は、個の力を持たず、数の力も『勇者と言う称号』と『王の勅命』という自分以外の力で得ていた。

結局、あの餓鬼自身は何の力も持っておらず、信頼を得ていなかった

た仲間に見限られて死んだ。

せめて個の力がなくとも、信頼で数の力を得ていれば死ぬことはなかっただろう。

「最初は、血筋を絶った者だからという理由でした。ですが、話をしているうちにあなたしかいないと思ったのです」

「そいつはどうも。だが、あなたの目は曇ってる。自分の身を守るだけの力しか望まないような奴に、誰かを救うための力不要だ」

俺は俺のために生きている。

生きる過程で誰かを助けることはあっても、今後そいつを助けるために動こうとは思わない。

助けたのは、たまたま都合が一致したか単なる気まぐれだ。

そんな奴にその他大勢を救えって頼むのはお門違いもいいとこだ。

「私はすべてを救って欲しいとは頼みません」

「は？」

今度は俺が呆ける番だった。

今なんて言った？　すべてを救って欲しいと頼まない？

そりゃじゃあ勇者じゃないだろう。

勇者とは苦しむものすべてを救おうとする自らの分を弁えない愚か者だ。

その愚か者の力の源が加護だ。

加護はそんな愚か者の夢を叶えるためにあるんじゃないのか？

なぜ自己中心的といってもいいような俺なんかに加護を与えるんだ。

「私の願いは魔王を……私の妹を倒して欲しい。その過程で大勢の人を助けるかどうかはあなた次第です。勇者が人を助けるといっているのは、初代勇者の行動を見て人々が勝手に作り出した考えです。私は

そんなことを願ったことはありません」

存外黒いな。この女神。

その他大勢を見捨ててでも、自分の願いをかなえて欲しい。
極端な個の追求。若干、親近感がわくな。

「この俺に魔王を倒せと？」

「そうです。そのために、私の加護を与えます。代償はたった1つ。
魔王を倒すことのみ。それ以外は望みません。例え、あなたがその
他大勢を見捨て、その結果国が滅ぼうとも私は構いません」

「神様とは思えない自己中心的な考えだな」

「自覚しています。ですが、人の都合など自分の都合の前にはどう
でもよいでしょうか？」

「ごもつとも」

「正直に言いますと、その他大勢を救わないほうが目的の達成は早
いのです」

「とうとうと？」

「今までの勇者なら困難に立ち向かい強くなる必要があつたでしょ
う。しかしあなたはもう十分強い。私の加護さえあれば十分魔王と
渡り合えるほどに」

「なるほど、力があるなら、わざわざ経験値を稼ぐ必要はないと」

「ないとは言いません。ですが、今までの勇者たちよりもより少な
い困難で事足りるでしょう」

「あなたの願い最優先なら、経験値稼ぎ（困難）は少ないに越した
ことはないわけか」

「そうです」

「魔王か…… いずれは戦ってみたい相手だったが、俺だけの力で
はまだ無理か」

「お願いします。私の願いを叶えてはもらえませんか」

「だが断る。さっきも言ったが俺に加護はいらない。もし、魔王を

倒せと言うなら加護なしで俺の力だけで倒す」

「それでは、いつになるか……」

「加護をもらったところで同じだ。俺は俺のやりたいようにやる。

そもそも、始めに言ったが頼む相手が間違ってるんだよ。そういう

頼みは、世界を救う気満々の若者に頼みな」

さっさと話を終わらせてして寝直したい。

俺が加護を受けないのは決定事項だ。

魔王を倒すつつうのは、自分の力だけで倒せるならやってやってもいいが、女神曰くまだ無理らしいし、俺も勝てるとは思っていない。

「わかりました。今日のところはこれで失礼します」

「今日のところは……じゃなくて、もうくんな」

女神が消えると同時に気配もなくなったことを確認し、さっさと寝なおした

第3話：王都からの迎え

光の女神とやらが枕元（？）に現れてから1週間が過ぎた。

次の朝、適当な依頼を受けて町を出た。

酒場には余りやる気をそるような依頼はなかったが、何もせずにいると体も鈍るし金も減っていく一方だ。

請け負った依頼は、近場にある森の魔物退治。退治する魔物は、大陸全土で最も多い言われるゴブリン種。

あいつらは、繁殖力旺盛で数こそ多いものの、個々は弱く頭もさほどよくねえ。

中には、魔法を使う奴や戦闘の指揮を執る奴など優秀な個体もいやるが、今回の依頼ではそういった優秀種は確認されていないし、討伐対象でもない。

まあ、狩った証拠をもって行けば報酬の割り増しくらいは期待できるかも知れねえが……

優秀種でないなら、新米兵士の実践訓練に使われるほど弱い。

そんな奴ら相手じゃそそれねえ。

依頼には期限がなかった。決まった数のゴブリンを狩り、証拠を持つてくればいい。

俺は手持ちの食料と相談しながら、時間をかけて各個撃破していった。

時間をかけずに終わらせれば、その分食料代も浮くが、そんなもんをケチって命を落とすのも馬鹿らしい。

冒険者よ。臆病者であれ。

ベテランの冒険者なら誰もが胸に刻んでいる言葉だ。

臆病とは言い換えれば、用心深いってことだ。万全に万全を重ね、

それでも万が一の可能性を想定して警戒する。
何が起こるかわからない場所で、警戒のし過ぎという物はねえ。
一人ならのさらだ。

今回だって、運悪く休息中に発見されたこともあれば、分断したつもりが他の奴と合流させてしまい、不利な状況で戦った場面もあった。

弱いとは言え、数で押されると対処するのは大変だからな。

ズタ袋に証拠を入れて、町まで帰ってきて見れば。入り口で重装備の騎士2人が立ってやがる。

なんだか知らねえが、厄介ごとの臭いがプンプンしやがる。

長年培ってきた第6感とも言つべきものが、面倒ごとの鐘を鳴らしている。

巻き込まれる前に逃げた方がよさそうだ。依頼は、ほとぼりが冷めたら報告すればいい。

そう思って、もと来た道を戻り森に入ろうとすると、森の中から同じような装備の騎士が4人。

俺を見つけるとなにやら話した後、笛を鳴らした。

振り返れば、入り口に立っていた騎士の一人が俺の方へ向かってきた。もう一人は街の中に戻っていった。

仲間でも呼びに言ったのかも知れねえな。

「その冒険者、名を名乗れ」

街の方を向いている間に、4人の騎士が俺の前に並び、槍や剣など各々武器を構えていた。

唯一、名乗れといった騎士だけが構えていない。おそらくこいつがリーダーだろう。

「俺の名はエイブラハム。エイブラハム・ウォーロックだ。コレで

いいか？」

「その名は偽りではないな？」

「なんで偽名を言わなきゃならねえんだよ」

「わが国の神殿に信託が下った。エイブラハム。貴様を王都まで連行する」

俺の勘は大当たりだったらしいな。

間違いなく厄介ごとだ。

「生憎と連行される理由がわからんな」

「いずれわかる。黙って連行される」

「いずれ判るならここで教えるよ。それに納得できたら大人しく着いていつてやるよ」

リーダーはしばらく黙ったが、話してもいいとも思っただのか理由を話し始めた。

「……1週間前、勇者の血が絶えたと信託が下った。最初は皆笑い飛ばしたが、ついで従者の報告で森の魔物に殺されたことがわかった」

ああ、そういえば勇者もどきの餓鬼をぶっ殺したな。あの餓鬼は森で死んだことになってるのか。

餓鬼にくつついていた奴らの証言か。それともマスターが身包みを剥いで、森に捨てて処理したのか。

まあ、そんなことはどうでもいいな。

下手に喋って、俺が殺したことがバレても面倒だ。

「さらに女神より信託が下った。エイブラハム・ウォーロック、お前を次の勇者に任命すると」

あの腐れ女神。

物分りよくあつさり引いたと思ったら、王国の連中を動かしゃがったか……

何が何でも俺に勇者の力を授ける気か！

しかも、王命で魔王退治も最優先目的で強制させる腹だな。

「これは名誉あることだ。一介の冒険者が勇者に抜擢されるのだ。さあ、判ったら武器を渡せ。土中は我ら第5騎士団が護衛する。危険はない」

さて、どうしたもんかねえ。

目の前には重装備の騎士が4人内3人がいつでも攻撃できるように武器を構えている。

後ろには同じ装備の騎士が1人。振り返らねえとわからねえが、おそらく武器を構えているだろう。

オマケに、増援を呼びに言った可能性のある騎士が1人。

とてもじゃねえがどうこうならねえな。

死ぬ覚悟を持っても前4人のうち2人を道連れにするくらいだな。

「わかったよ。王都まで同行しよう。だが、その前に依頼の報告を済ませて荷物を取りに行きたい。そのくらいは構わねえだろ？」

「我々も同行していいなら構わん。だが、先に武器は渡してもらおう。報告に武器は必要ないだろう？」

「へいへい。ほらよ。長年使ってる大事なもんだから捨てたり手荒に扱っんじゃねえぞ」

リーダーに背負っていた両手剣と懐に忍ばせてある短剣、その他手持ちの武器をすべて預けた。

受け取ったリーダーは構えていた騎士3人に武器を持たせ、どこか

へ運ばせた。

報告には、リーダーと後ろの騎士が着いてくるらしい。

騎士2人を伴って、酒場に入った。

その途中で、予想通り増援の騎士に出くわした。その数10人。

俺一人を連行するには、ずいぶん物々しいじゃねえか。

そいつらにも、リーダーが指示を出し、どこかへ向かった。

酒場に入り、カウンターに腰掛けた。

「よう。マスター一週間振りだな」

「お前の方も元気そうで何よりだ」

「まずは仕事の報告だ。確認を頼む」

ズタ袋をマスターに渡した。袋は赤黒く染まっている。

それを平然と受け取って中を検めるマスター。

あの袋の中身はゴブリンの右耳だ。

大体3・40体分くらいは入っている。魔物討伐の場合は、材料目的でない場合、体の部位の一部を持ち帰る。

マスターは中身を確認すると、従業員を呼び、裏に持って行かせた。さすがに飯を食う場所で、耳の数を数えるわけにはいかねえからな。

「報酬は数がわかり次第払おう。何か食っていくか？」

「勇者と同じものを頼む」

マスターの眉毛がわずかに動いた。

「勇者と同じものでいいんだな？」

「ああ」

「ずいぶん軽く済ませんるんだな」

「何が何やらわからんうちに王都に行くことになったし、のんびりしている余裕がないのさ。ついでに、マスターにも一杯おごろう。」

こんなことなら部屋に呼んで酒盛りくらいすればよかつたな」

「そいつは太つ腹だな。だが仕事 중이다。金だけいただいておこう」

「代金ははずむぜ。ついでにこちらの第五騎士団の方々にも一杯頼むわ」

「不要だ」

「そうかい。やれやれ勇者といい厄介ごとが多いぜ。まったく」

「ああ、あの少年か。森に行ったきり帰ってこないがどうかしたのか？」

白々しい。身包みを剥いで捨てたのはマスターだろうに。

ま、そんなことはどうでもいい。

「エイブラハム。余計なことは言うな」

「へいへい。」

「少し待ってな。きゅつと冷えた奴を用意してやる」

そついうとマスターは奥に引っ込んだ。

さて、マスターに意図は伝わったはずだ。あとは、何処までマスターが知っているかだな。

頼むぜ？ マスター

第4話：ウォーロックの秘密依頼（前書き）

今回は、前話でウォーロックがしていたマスターとの会話に秘められた内容の解説です。

第4話：ウォーロックの秘密依頼

Master side

さてさて、いよいよやばい気配がしてきたな。

まさか王国軍が辺境まで来るとは……

幸い、勇者殺しの件を調べに来たわけではないようだが、無関係でもないようだ。

ウォーロックが騎士に拘束され、ウォーロック自身が勇者の情報を欲している。

絶対に何か裏がある。

まあ、それはおいおい調べるとして、まずはウォーロックからの頼みが先だな。

俺の店で、『名前』と同じ食事というのは一種の暗号だ。これは俺が認めた奴しか知らない。

ウォーロックは、その暗号を知っている数少ない常連だ。

この暗号を使って頼んだ奴は『名前』の情報を求めている。

そして、会話の中に場所を示す言葉を入れる。ウォーロックの場合は部屋で酒盛り。つまり部屋だ。

さらに会話の中には、自分の状況を伝える言葉が入っている。

『のんびりしている余裕がない』

つまり急ぎで欲しいということだ。

おそらく、自分で部屋に行く余裕がないか、あっても周りを監視している騎士の目があるのだろう。

そうになると、部屋に置くのではなくウォーロックの荷物に忍ばせるか。

『騎士団にも……』と言っていたので、騎士団の情報も追加する。

そして、最後に『厄介ごと』と言っていたが、おそらく奴自身の状況だろう。

総合すると、ウォーロックは何らかの厄介ごと（勇者関連）に巻き込まれ騎士団と勇者の情報が欲しい。

それを部屋に送って欲しいが、回収する余裕はなさそうということだ。

代金の方は、料理代として徴収するところだが、丁度依頼を達成した後だから報酬の方からいただいでおく。

「少し待ってな。きゅっと冷えた奴を用意してやる」

と、了承の暗号を言って裏に引つ込んだ。

騎士の目と耳を警戒しながら、従業員に指示を出して情報を本に写させる。

この本の前編はくだらない3流の話が書いてあり、真ん中に空白がある。そこに情報を書き込む。そして後半には3流話の続きが書いてある。

一見すれば、くだらない3流話の本にしか見えない。仮に調べられても真ん中まで確認することはまずない。

書き込みが終わったあとは従業員に荷物に忍ばせるように指示を出した。

これで、ウォーロックからの秘密の依頼は完了した。

後は、適当に食い物と飲み物を出して終わりだ。

せめてもの選別に食い物と飲み物には色をつけてやるか。

第4話：ウォーロックの秘密依頼（後書き）

作者的には、マスターとウォーロックの会話にはこんな裏があったんです。

読者の方に何とか伝わるように考えたんですが、やっぱりわかりませんでしたかね？

暗号とか難しいです。

読者にはわかるように、でも露骨過ぎて騎士にバレるだろ！と言われないようにしなければいけません。

ううん、難しい。

暗号を考えるのも難しいのに、その難易度を適度に難しくしなければいけない。

今後も、この物語内で暗号を使う機会があると思うので、次回に向けて勉強せねば！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5836t/>

戦い好きの勇者【改訂版】

2011年8月14日02時39分発行